

紹介

難の常光庵の桜

—その歴史と後継の生長の尊重を—

会員 羽 柴 弘

佐伯三の丸の桜も、上浦津井公園の桜も、今(四月上旬)が満開である。しかし「花の生命は短かくて」すぐ散つてしまい、華やかな姿はアツという間である。木莖が會員の手に届くころは、もうすっかり青葉のころである。から、前項の塩竈桜の記事と共に、読者の関心も惹くまいけれど、今はまだ桜満開の好時節であるし、三月二十五日黒沢の東光庵の観桜もしているのので、敢えて紹介したがた、二三私見をのべて見たい。

国水田独歩が鶴谷浮館の生徒を念ふ、数人の教員と共にはるばる東光庵の桜を尋ねたことは、彼の日記「欺かざるの記」にしろされてはいるが、独歩に限らず春を待ちかねていた人々の、最大の関心事であつた。それは何故か。その答の鍵は至極簡單、當時は今のような「柴井吉野」という桜は全く存在せず、山ふとこゝろに咲く山桜が、四月土下旬でなくて咲かなかつた(三重桜のような里桜の類より外には、観るべき桜のなかつた時代であつた)。

そこに東光庵の桜の巨木である。三月二十日と過ぎると、薄緑に僅かに紅を加えた葉と共に、塩竈桜特有の優艶な蕾が、ほとんど一斉にほころびそめる。

そこで前頁のように提おに移し植えられて「東光庵の桜」と愛賞されることになつた次第である。

同じような似た話が、難の常光庵にもある。この方は黒沢から持つて帰つた年月、人の名前から年令まで書かれていて、極めて確實である。実は「佐伯新聞」(主幹阿南卓)の大正七年四月七日の記事である。先ず全文をお目にかけよう。

大きくなつた

難 常光庵の桜

—今年に庵を改築に在る

当所難小字屋敷常光庵の桜樹は幹の廻り約五尺あり、花満開の際には約五畝面の天を覆ひ美觀を呈するに由り、近年花時に至れば觀桜の客日々絶えざる有様なりと云ふ。

此の木は明治十七年旧正月の文、馬鑲さん参詣の帰途、黒沢東光庵に年始に寄りたる難の黒沢政五郎(七四)、黒沢初五郎(五七)、中川勇吉(五七)及び木原典平(五二)の四氏が、全庵を辞する際、庵に向つて右側の巨樹の下に生え出で居りし高さ一尺諺りの若芽を貰ひ受けて持ち帰りたるものなりと云ふ。

因みに同庵は養賢寺の末寺にて、佐伯お四国の四番の札所となり居れるが、建築既に古く修繕に多くの経費を要するより、同地の有志は寧ろ此の際寄附金を募りて改築し、桜の名所たるに耻かしからぬ程度の工事を為さんものと、目下準備中なる由。

私は昨年の春、この桜を尋ねて常光庵を訪れた。桜は十数年前倒れてすでになかつた。然しその大きな根株がらひこびえが生長し、もう四米ほどの高さの若木が塩竈桜の姿を見せていた。この若木が往年かような桜になるためには、十年なり二十年なりの年月が必要であるので、會員皆さんの心にとめておいていただきたい。(終)